

新 聞 事 實

第 五 號

定價三錢五厘



西垣文庫

文庫 10

7306

5

80

75

70

65

特 文庫10
7306

5 緒言
天下ノ事情ヨク相通シ未ダ見聞
知ルハ新聞紙ニ如クハナシ維新
日ニ盛ニシテ世ニ裨益アルハヨク
リト雖ヒ僻遠ノ婦女子ニ至テハ未ダ其
ルモノ鮮シ豈聖世ノ民ト言フ可クニ
公布ノ人民普ク熟知セリカニ
都鄙ノ所報勸懲ノ助ニ成ルニ
併々各種新聞ノ参考ニ其讀
名ヲ附シ画々紳士紳史ノ
女子ヲシテ共ニ知識ヲ開カシ
官許 明治八年五月十一日

官許新聞事實

第 五 号
明治八年七月十一日

西垣立序



布告

編輯 松水平吉
補正 吉田庸徳

東京府

其府下郵便集配の儀是迄六度の處来る七月一日より更に
四度を増加し都合十便に改正候條此旨相心得府内へ相達
且私塾等郵便請取箱有之向へハ其配達時間と量り毎度開
函可致旨をも可相達此旨相達候事

明治八年六月三十日

内務卿大久保利通

右の通達有之候に付各區無洩可相觸候也

明治八年七月二日

東京府知事大久保一翁

新聞事實五

第三十一号

市在各區々長戸長

火葬の儀は付本年第八拾九号公布及び内務省乙第八十号達の趣有之候は付てハ自今火葬の分は限り未引内從前の葬地へ瘞埋不苦旨同省より為相達候は付此旨各區無洩可相達事

明治八年二月二日

東京府知事大久保一翁

○番外

市在各區々長戸長

今般東京裁判所第一大區三小區八代洲町二丁目三十番地小新築落成は付来る十日開廳候條尤當日移轉事務繁劇は付訴訟其他諸願同等ハ同十二日より可差出旨同所より申越は付此旨各區無洩可相達事

明治八年七月九日

東京府知事大久保一翁

新聞

○栃木縣下野國安蘇郡下館野公立小学館良学校の生徒下等小学進級試験は付學務課の官員方も出張りて今年六月十一日十二日と兩日小五十余名脚り

滞り卒業し即ち夫々賞賜がらり

幼児の第八級の卒業

小就く年ありあ

らど〜平常秋鞆の勉彊者〜同月二十日



秋山馬之助 五年六月

縣廳こゝ 登高たか 自車こゝ 一部

三史略 一部

賞賜あたま 頂かぶ 下した 頂かぶ 下した 頂かぶ 下した

○筑摩縣下信濃國上諏訪ある大和耕地の松村長利といふ人あり此人の次の弟小東といひる當十七歳

幼少より癱背の癩疾を患ひ遠方い勿論近所の歩行も碌々出来を難哉いた

居りたりたが其又未の弟繁見といふハ當十

四歳あり学校へ行き段々上級と見聞し疾と流し羨やかりくおとひ何卒予も

学文いた一度事と常々望しけり未の弟や繁見ハ



志の深きと察し當三月頃より仲の兄東と脊負ひ弁當や書

物其外りりくのそのやと兩人分と持て日々学校へ登り

俱々懈急なく出精りたり

も其むつちき

事と学文の志し厚きと

を感心せぬり此とてハ無しと云

此事がついハ縣廳に申し御賞賜有りたしと申上ふやりたり



○千住宿

南組の

花屋某の

息子栄太郎と云

ものハ當十二歳

ふきりあそび誠

よおとや〜死生

もつれ〜兄弟

中も睦々しく殊ホ

両新を大切ホ〜親の

家業の手傳つ〜居り〜

ちよ〜不奉るかお父親ハ



昨年中より病氣多〜家業も出来ぬ

程〜細腕〜も親父小替り

日々怠る事も〜尚い〜又

病氣も手厚く看病いた〜た〜

當年四月の頃つ〜小養生叶〜

黄泉の人と成り〜た〜榮太郎を〜

家内一同大々歎き其後榮太郎ハ商い〜も一際精出〜母

と弟妹と自分〜も四人の暮〜を一人の腕〜立〜

云ひ〜十二位の子供〜ハ実〜感心〜

つも御賞賜を頂〜に成りせ〜



○能く人の諺云ふ事〜急事小出合〜其事のつ〜間

小合ひの多る事と盗人と捕へ繩と索と
 つまらぬ是の夫とハチツト野ざらなん大違ひ
 泥棒頼まきく繩を索とやり其繩
 一く巴まらぬ泥棒縛らたたと
 つふ前代未聞の話ハ熊谷
 縣管下武藏國小川驛
 高谷村荒物乾物渡世
 喜十郎と云りの有り七月
 三日午後五時頃一人の男来り
 麻五錢を買ひ志ざらる其店ハ腰け四方
 山の浮世話ハ小時をりつー主人ハ茶を
 拵へ彼の男ハ進めやどまらぬ彼の男の



云ふあハ私ハ此麻を繩と索ふとわりの人ガ
 遂ハ繩と索ふたる事ガかんダどう
 したと云らうと言ふ小喜十郎ハ
 繩と索ふハ得手ものや
 五錢下さらば索あく進せん
 と言ふ小幸の事なり御頼
 申と話しの中ハ早や繩も
 索ハ終りけまは彼の男ハ
 其繩を受取るや否やどつ
 と立ち大音揚げ我ハ是
 盗賊なり此繩ハ即ち汝を
 縛らんガため汝ハ索とせ



たるかりと忽ち喜十郎とワケ一先銀貨四圓猪幣二圓六十
 錢錢四十三貫文都合十圓九十錢と奪ひとり跡々々々
 逃失せたり泥棒小
 茶と進め繩なはすく
 索なはふく遣り
 其繩なはと縛らる
 く稼なはぎたれ
 たる金と取ら
 とくくハ餘り
 間の救なはととあー
 ぞん御坐らぬり
 報知新聞小出て有りきし



○東京府下第六大區深川森下町の住すま黒修験者の弟子
 三田村大学と云ゆのハ他出たく家へ歸かへッる来ると
 或あるる男おとこと女房にようぼうとさく向むかひを吐はきを去さる居ゐたのを
 不ふ斗と妙めうを處ところへ氣きを廻まわし夫おとこ々々
 つい女房と争あざをひををど
 の女房ハ何なにも別わかれず仔細しじゆ
 も女房事にようぼうごとゆ名な全ぜんく借かけ
 金取かねとりへ言いひ
 誤あやををし居ゐり
 と有あの終しゆうと申まうせども
 亭主ていしゆうハ中ちゆう々承しょう知ちせむ
 夫おとこむかりをハ有ありと



云ふやうに女房を打擲し更にお覺へのや死事など余り手は
 ど死折檻ふ今に女房もたまりかね斯う疑ひを受しうへら
 生る居る訳もゆゑを死ん後明りを立んと言ひ述ぶる
 ハ然るに望むを叶はらうサア死ね早く死ね失せよ供
 一人の子供をが残さるゝ迷惑千万死ぬる子どもを
 とをく小連も死ん死まうがよんと言ひつゝ其身の
 飛出しつぐくへ性まゝや去ばし程経て家お歸りしが
 跡おぼれんゝ持来る棺三ツ並ぶと興き込
 一ツの手前ニツハ子供サア死ね
 と居催遣女房も驚駭仰天一何
 まんぢも何んゆりと同ト町
 ある知り合の人の家ぢぢ



逃げ出せと亭主の怒り
 猶やまぢ其家ぢぢも
 押かまぢ彼是がヤ
 まるうら小第六
 分廳の巡官来り
 種々ワラくの
 説諭あつて
 疑ひの晴しむ事
 穩あつに濟せられたが
 困つた事あり残りの棺二割
 引けをも充方へ引取呉よと
 頼めども猶迷惑と請取らむ



余儀をく三ツとお毀し籠の下へ差入るゝ何と珍ら〜
話〜をいなりせせん。

話説

○へい御免成さんヤシ

御師匠さん(手習師匠)

私チヤ此野郎の親父

御坐りや〜と御坐いゆまが

今日御前さん所へ参りませぬの

別の事も御座りヤセン此野郎の

事で御坐りヤスグ全体此野郎と申と

ものハ年も往り多〜と高慢チヤクレテ



居す〜を毎日御前さん所〜と歸ッマ来ると

と〜小種々ナ本をわつぎ出〜やアガツク

單語篇〜と圍子篇〜とが大々

糸タ猫タ蔵タ鳥タの鳥タの

其中おのや〜とわつりもやん

西洋の亞細亞〜何とら

と唐の國の亞米利加

〜と〜と〜か〜で其山の深さ

何百里〜國の幅の太さ〜幾尺〜彼地

西の半球〜此地が日濟の困窮〜と〜世界

星だ〜の星が世界を三角〜豆腐が四角〜か月〜と〜丸

いのと出放〜の寐言〜と〜空言〜と〜突〜



一声ドナッて叱り付ると何空言と云ふものゝうんぢう御
 前うんく御覽と云ひたまはけきと御師匠さんの前たがうう
 見へるも私チヤ俄鬼のおゆんあう手習ひんがア随分いろ
 はのいの字も讀む本とイッチヤア一字も書た事の無いと
 云ふ男だらう何おもふりませんが全体御前さんがあんか
 事と教へるんが御せへあまら私チラかんがア憚りぢう
 爰と東京ッ子(生)まるとのんたうもどら東京中の道法うへる
 くスッホ知まねへお唐の亞米利加の道や天竺の高さたの
 山の深さかんがアどうし〜知まませか余ンナリ滅法界を
 咄しおや有りません〜定め〜切支丹〜テレンの法ぢも有
 きせうそれお就チヤア御前さんお御頼ミさう〜〜事
 が有りませんがのう紙が有ませんう〜(第七号)おあまあやう

日冲社

第一号 大正一二年

吉川町二番地

編輯兼 松本平吉



淺草寺地内角

大橋屋彌

下谷仲町

伊勢屋利兵衛

本郷二丁目

古賀屋勝五郎

神田須田町

澤村屋清吉

日本橋通二丁目

丸屋鐵五郎

芝大神前町

萬屋吉兵衛

麴町六丁目

尾張屋清五

北新場町

伊勢屋平治

深川常盤町

越前屋嘉

東京賣弘



三
七